

ニヨッテ受動文の成立：『西国立志編』を資料として

尊田，佐紀子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8979>

出版情報：文献探究. 41, pp.1-12, 2003-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

ニヨッテ受動文の成立

—『西国立志編』を資料として—

尊田 佐紀子

1. はじめに

現代日本語の受動文には少なくとも二種類、すなわち近代以前の日本語に固有の種類
の受動文と、欧文直訳文体の影響によってもたらされた非固有の受動文がある^{注1}、とい
う説を支持することは、現段階においては妥当であると思われる。

本論は、「欧文直訳文体の影響によってもたらされた非固有の受動文」（ニヨッテ受動
文）とその周辺を、その萌芽期における近代初期の翻訳資料『西国立志編』を用いてそ
の表れ方を調査し、考察を行うことを目的とする。

2. 固有／非固有の受動文とは何か

まず最初に、本論の前提として、日本語における固有／非固有の受動文とはいかなる
ものかを明らかにしなければならない。そのことについては、既に金水 1993 などにおい
て指摘されていることであるが、再び本章でそれを確認し、まとめることとする。

固有／非固有を意味的に類別するキーワードとしてまず「受影性 (affectivity)」を挙
げたい。固有の受動文はすべてこの受影性を有する^{注2} (受影受動文^{注3}) と考えられる。

具体的には、現代日本語における「私は太郎に殴られた」「花子は皆にほめられた」と
いった受動文が受影受動文であり、「私」「花子」という主体 (受影者) が、ある出来事
から何らかの影響を受ける、という事態を表わす。この場合、「殴る」「ほめる」という
行為の動作主 (対応する能動文の主語「旧主語」) は二格で表示される。

また、「太郎は次郎に論文を書かれた」といったいわゆる「間接受動文」ともよばれる
タイプの受動文も、「太郎」という主体が「次郎が論文を書いた」という出来事から何ら
かの影響 (この場合は迷惑・被害といった影響) を受けるという事態を表し、受影受動
文に含まれる。

現代日本語には、受影者が表面に出ない受影受動文もあり、そのタイプの受影受動文
も歴史的には固有のものである。例えば「お金が (泥棒に) 盗まれた」あるいは「家の
壁が (太郎に) 壊された」といった受動文は、非情物が主体であっても、その主体には
(一例として)「お金の持ち主」「家の持ち主」という、人格的役割を持った受影者 (潜

在的受影者^{注4}) が想定できるため、これらは受影受動文であると考えられ、旧主語は二格で表示される。

受影性を持たない受動文も現代日本語には存在する。そしてそれは歴史的に非固有のものである^{注5}。「高層ビルが(A社によって)建設された」「テコンドーの選手が(JOCによって)オリンピックに派遣された」といった受動文は、「A社が高層ビルを建設した」「JOCがテコンドーの選手をオリンピックに派遣した」という、対応する能動文の動作主を主体の位置から降ろし、代わりに動作の対象を主体として表現するタイプのものである。これを、益岡 1991 にならって「降格受動文」^{注6}とよぶこととする。この降格受動文において動作主(旧主語)を明示する場合には、ニヨッテ格で表示される。そこで、旧主語が表示されるタイプの降格受動文を特に「ニヨッテ受動文」とよぶ。

特に、創造・作成を表す動詞(「建てる」「作る」…など)が用いられる受動文では、ニヨッテ受動文のみが許容される^{注7}。それは、「建てる」「作る」という行為の対象は、その行為の結果存在するものであり、受影性を持ち得ないという分析による。

すなわち、「A社が高層ビルを建設した」という能動文に対応する受動文としての「*高層ビルがA社に建設された」という文が許容されないのは、「高層ビル」という対象が「建設する」という行為そのものからは影響を受けることができないため、(歴史的に非固有である)受影受動文にはなり得ない、ということである。

また、歴史的に非固有なものとしてされる「属性叙述受動文」^{注8}とよばれる受動文があるが、本論では特に考察の対象としない。

3. ニヨッテ受動文(降格受動文)の発生

歴史的に非固有であるニヨッテ受動文が、蘭学・英学の直訳文法書から発生したことは、金水 1992 に既に指摘されることである。その発生当時の様子を、具体例で追ってみることとしよう。

まず、蘭学の文法書として、オランダ語文典^{注9}の代表的な翻訳書、大庭雪斎訳『訳和蘭文語』(前後編・安政二年刊)^{注10}における受動文に関連する箇所を、以下に挙げる。

(124) 他動活辞ハ

先生ガ教ユル己レノ書生ヲ
de meester onderwijst zijne leerlingen. [先生ガ己ノ書生ヲ教ユル]
大工ガ建ル家ヲ
de timmerman bouwt het huis. [大工ガ家ヲ建ル]

ノ如ク、其業作ヲ他物ニ與フル者ナリト知ルベシ。(略)

(125) 受動活辞ナル者ハ、業作スベキ物体ノ、那這ノ業作ヲ他ヨリ受ルト為シテ観ルベキ者是ナリ。即チ

書生等ガラルヽ由テ先生ニ教ヘ
de leerlingen worden door den meester onderwezen. [書生等ガ先生ニ由テ教ヘラルヽ]

家ガラルヽ由テ 大工ニ建テ
 het huis wordt door den timmernan gebouwd. [家ガ大工ニ由テ建テラルヽ]

等ノ如シ。然レトモ是レ原来、活辞ノ各類ニ於ルヨリ、一種別ノ形成ノ者トス。何者右ニ挙タル例ニ觀ルカ如ク、他動ノ形ヨリ受動ノ形ニ転用シ来ルカ故ナリ。且ツ和蘭国活辞ナル者ハ、本来変画ニ由テ、受動ノ形ヲ有タズ、之ヲ夫ノ助辞 ^モzijn, ^{デアル}worden, ト、判辞トノ配合ニ由テ得ル者ナリト識得スベシ

(前編卷中・二十一丁オ)

『訳和蘭文語』は、蘭文の中では単語に直訳のルビを振り、その直後に直訳和文を置くという体裁を取っている。上記の引用からわかる通り、オランダ語における受動文の旧主語表示に用いられる door には「由テ」、受動文を作る動詞 worden には「ラルヽ」というルビが振られ、直後の和文でもそのまま用いられている。

時代が下り、蘭学から英学へと学問の趨勢が移ると、その文法知識も受け継がれていった。受動文に関しても同様である。以下その具体例を、幕末から明治初期にかけて刊行された直訳文法書、阿部友之進訳『挿訳 英吉利文典』(慶応三年刊)、島一徳訳『格賢勃斯 英文典挿訳』(明治四年刊)注¹¹より挙げる。

[挿訳 英吉利文典]

What is meant by gender?

何ガ (三) ルヽ (五) 顯ハサ (四) 依テ (二) 性ニ (一) 乎 (六)

(第三編 七丁オ)

Difference of gender is shown by three methods first, by a word prefixed, (後略)

区別ハ (三) ノ (二) 性 (一) ルヽ (八) 見ハサ (七) 因テ (六)

三ツノ (四) 法ニ (五) 第一ニ (九) 因テ (十三) 一ノ (十一)

語ニ (十二) 先キ立テタル (十)

(第三編 九丁ウ)

[格賢勃斯 英文典挿訳]

2. if final y is preceded by a consonant they change it to ies as, fly, flies.

第二ニハ (一) ナラバ (八) 結尾ノ (二) 一ガ (三) タル (七) 先ダ (六)

因テ (五) 子韻ニ (四) 彼ラガ (九) 変ズル (十三) ソレヲ (十)

迄デ (十二) 一ニ (十一) 如シ (十六) 、 蠅 (十四) 蠅ノ (十五)

(初篇・三十丁ウー三十一丁オ)

『格賢勃斯 英文典挿訳』『挿訳 英吉利文典』とも、『訳和蘭文語』と同様に、原文

の単語ごとに和訳をあてる、という体裁を取っている（和訳文は、その単語に振られた漢数字の順に従う）。

『挿訳 英吉利文典』においては、旧主語表示に用いられる *by* には「因（依）テ」、受動文を作る *be* 動詞には「ル（レ）」があてられ、『訳和蘭文語』と同様であることがわかる。

以上、蘭学・英学の文法書におけるニヨッテ受動文の発生当時の資料を簡単に追ったが、結論としては金水 1992 で述べられている通りに、「ニヨッテ受身文」は安政期に出版された『ガランマチカ』翻訳書あたりから公の目に触れるようになった。これらの書物では、オランダ語の受動文を「～（ラ）ル」で訳し、その旧主語表示に用いられる *door* に「（に）よりて」という訓を与えていたために、機械的に「ニヨッテ受身文」が生まれ、「その後、明治期の英文法直訳翻訳書にも同じ訳読法が受け継がれ、直訳体の出版物にも見られるようになった。」^{注12} ということであろう。

「機械的に「ニヨッテ受身文」が生まれ」た、というのは、上で引用した『訳和蘭文語』『挿訳 英吉利文典』のような直訳文法書の体裁がニヨッテ受動文を生み出した、ということである。本論で特に注目したいのは、この「機械的に」生まれたという点であり、この点に関しては、第5章で後述する。

4. 日本語／英語の受動文 (affectivity／involvement)

日本語において、固有の受動文には受影性 (affectivity) が認められる、ということは第2章で既に述べた。本論では、翻訳資料を扱うという性質上、英語の受動文についても何らかの規定を与える必要がある。

その点については、久野 1983 における「インヴォルヴメント (involvement)」をキーワードとして、簡潔に述べる。

久野は、「John resembles Mary.／* Mary is resembled by John.」「ジョンハ、メリーニ似テイル。／メリーハ、ジョンニ似ラレテ、気持ち悪ガッテイル。」といった比較を通して、「英語において、他動詞でも、それが表す動作・状態が、目的語を直接的に動作・状態のパーティシパントにしないようなものは、受身形にして用いられない」という一般化を行っている。久野のいうインヴォルヴメントとは、「心理状態の直接対象」であること、および「動詞が表す動作の影響を直接的に受け」ること、であり、英語の受動文を成立させるためには、受動文の主語が対応する能動詞の目的語であるとともに、事態に強くインヴォルヴされているという条件が必要である、とまとめられる^{注13}。すなわち、*resemble* が表す動作・状態は、主語が勝手に行う動作であり、主語が一人で陥る状態であって、その目的語は、全くその動作・状態にインヴォルヴされない、ということである。

しかしながら、「メリーはジョンに似られて気持ち悪がっている」という受動文（そし

てそれは日本語において歴史的に固有のものである) が日本語で成り立つことからわかるように、インヴォルヴメントは日本語の「固有の」受動文において必要な条件ではなく、日本語の「固有の」受動文に必要な条件は既に述べた「受影性(affectivity)」である。逆に、英語の受動文を成り立たせるには、受影性は必要な条件ではなく、インヴォルヴメントを有していることがその条件となる。

involvement と affectivity は相容れない性質の概念ではなく、重なる領域があり、またその境界も曖昧(fuzzy)なものであることは金水 1993 において指摘されているところである。

すなわち、日本語における非固有の受動文(降格受動文(ニヨッテ受動文))が欧文翻訳体の影響によって生まれたものとするならば、その非固有の受動文は、受影性(affectivity)を持たず、インヴォルヴメント(involvement)のみを持つタイプの受動文ということになる。

5. 調査

5-1. 『西国立志編』について

中村正直(敬宇と号す、1832-1891)がサミュエル・スマイルズ(Samuel Smiles,1812-1904)による偉人立身伝、*Self-Help, with Illustrations of Character and Conduct. 1857*の増訂版(*revised and enlarged version,1867*)をもとに『西国立志編』を世に出したのは、敬宇四十歳のおり、明治四年七月のことであった。

いったん世に出ると、この『西国立志編』は驚異的な売れ行きを示し、一説には、当時の日本で総計百万部は出たといわれ、当時の知識人に多大な影響を与えた。

明治維新という未曾有の大転換を経験し、新たな価値観を模索していた当時の日本人にとって、生き方の指針を示す格好の著として本書が受け入れられたのはうなずけることである。

また、大和田建樹は『明治文学史』(明治二十七年刊)において、『西国立志編』と中村の手になる訳書『西洋品行論』(明治十一年刊)の文体を評して「此書の訳し方に就ては人或は非難を試むるものありといへども。今日に於ける英学の程度を以てしても。猶之を最も完全なりといふを得べく。其中に含まるゝ西洋道德主義が。其書の小学賞與品と為り或は英文翻訳の参考書と為りつゝ広く我社会に伝播せられたる事ハ。争ふ可からざる事事実なりとす」^{注14}と述べ、中村の欧文直訳の文体は、非難はあるがあらたな西洋主義を受け入れるには優れていたとしている。

本論の調査には、以下の二資料を用いた。

『改正西国立志編 原名自助論 一千八百六十七年倫敦出版』(英国^{スマイルズ}ス邁爾斯著、中村正直訳)活板一冊、東京 木下讓蔵板、明治十年刊^{注15}

SELF-HELP; with illustrations of character, conduct, and perseverance. (the author's revised and enlarged edition.) SAMUEL SMILES, 1876^{注16}

5-2. 用例の検討

①固有の受動文（受影受動文）—旧主語二格表示

①-1（対応する原文の旧主語がby格で表示される）

1) 人ノ品価ハ、常ニソノ朋友ノ品価優等ナルモノニ管治セラルトモノナリ（第十二編十章）

(… for the worth of a man will always be ruled by that of his company.)

2) 各々ソノ自由ノ行為、ソノ習慣ノ中ニ掛リ、己ガ身ヲ固メル鏈錠ニ縛セラルベシ（第十三編十二章）

(… our actions become of the nature of fate ; and we are bound by the chains which we have woven around ourselves.)

①-2（対応する原文の旧主語が明示されない）

3) 我が教誨、旧ニ仍ニ過ズト雖モ、甚ハダコノ少年ニ悦バレ、接受セラレタリ（第一板序（ス邁爾斯自序））

(But old fashioned though the advice may have been, it was welcomed.)

4) 人或ハオモヘラク、適宜ナル功業ハ、世ニ怠忽セラルト、コレ多クハ怠惰ニシテ志気ナキ人、功績ヲ成ス事能ハザルニ由テ、コレヲ以テ自ラ口ニ藉事ナリ。（第九編十二章）

(As for the talk, said he, "about modest merit being neglected, it is too often a cant, by which indolent and irresolute men seek to lay their want of success at the door of the public.)

1)～4)の主体はいわゆる「非情物」であるが、人格的役割をまったく持たないものではない。①においては、1)の「人ノ品価」には「(一般にいう)人」、2)の「各々ソノ自由ノ行為」には「行為を行う人々」が想定され、いずれも人格的役割を持った、<受影者>あるいは<潜在的受影者>が想定される受影受動文であり、旧主語は二格で表示される。①-1においては、和訳文に対応する原文はいずれも受動文の典型的な構文をとっている（be動詞+過去分詞、旧主語をbyで表示する）。

①-2においては、3)は「我が教誨」には「教誨を与える人物（私＝スマイルズ）」、という受影者が想定され、また、4)は「怠忽スル」^{注17}（無視する）という（マイナスの）

評価を表す受動文であり、非特定ながらく評価の対象となる潜在的受影者>が想定され注¹⁸、いずれも旧主語は二格で表示される受影受動文である。

②非固有の受動文—降格受動文（ニヨッテ受動文）

②—1（対応する原文の旧主語がby格で表示される）

5) サレバ、樂工^{ハイドン}海同ノ巧技ハ、罕^{ハンデル}埒爾ニ由リテ激發セラレタリ（第十二編十二章）

(Thus Haydn's genius was first fired by Handel.)

6) 印度ノ英領ハ、実ニ、中等種族ノ人ニ頼テ、勝ち得ラレタルナリ（第一編十五章）

(Indeed, the empire of England in India was won and held chiefly by men of the middle class —)

7) 人ノ品行ハ、無数ノ精美ナル事物ニ由テ、感化甄陶^{ケンタウ}セラルゝ事ナリ、即チ或ハ古人ノ儀範及ビ格言ニヨリ、或ハ、吾身ノ遭際ニヨリ、或ハ文字ニ由リ、或ハ朋友ニ由リ、他人ニ由リ、或ハ今日ノ世上ニヨリ、或ハ祖宗ノ遺ストコロノ嘉言善行ニ由テ、甄陶養成セラルゝ事ナリ（第一編三十四章）

(In fine, human character is moulded by a thousand subtle influence ; by friends and neighbors ; by the world we lived in as well as by the spirits of our forefathers, whose legacy of good words and deeds we inherit.)

8) 故ニ「凡百ノ事業ノ絶妙極美ニ至ル事ハ、特ニ専心勉力ニ由テ贏得セラルベシ」ト云ヘル教語ハ、…（第一編二十四章）

(Indeed, the doctrine that excellence in any pursuit is only to be achieved by laborious application, …)

9) 絶大ノ事業ヲ成スニハ、奇術妙法ハルニアラズ、マタ大才睿知ヲ要セズ、平常ナル工夫ニ由リテ得ラルベク、又平凡ナル資質ノ人ニテ為シ得ラルゝ事ナリ（第四編一章）

(The greatest results in life are usually attained by simple means, and the exercise of ordinary qualities.)

10) 凡ソ芸業ヲ修メテ、極妙極善ニ至ルモノハ、特ニ許多ノ辛苦勉強ニ由リテ得ラルゝ事ナリ（第六編一章）

(Excellence in art, as in every thing else, can only be achieved by dint of painstaking labor.)

11) コレ天授ニ由ルト雖モ、亦学習慣練ニ由テ生ジ得ラルベシ（第九編二十三章）

(and though this is partly the gift of nature, it is yet capable of being cultivated and developed by observation and experience.)

②—2 (対応する原文の旧主語が明示されない)

12) 真正ノ事業ハ、勇猛ノ工夫ヲ用フルニ非レバ、得ラルベカラズ (第八編五章)

(Nothing that is of real worth can be achieved without courageous working.)

13) 勞爾徳林徳忽爾斯徳曰ク、艱難ハ、勝チ得ラルベキ事ナリ」ト (第十一編三十三章)

(A difficulty, said Lord Lyndhurst, "is a thing to be overcome.")

②—1のような歴史的に非固有のニヨッテ受動文は、この『西国立志編』においては相当数見られる。また、②—2といった、旧主語を特に表示しないタイプの降格受動文も見られる^{注19}。

ところで、①／②という、固有／非固有の訳しわけはなぜ行われたのか。より具体的にいえば、①—1／②—1のように、対応する原文がすべて旧主語を by 格で表示しているにも関わらず、なぜ和訳文はニ格／ニヨッテ格と異なった旧主語表示マーカ―を持っているのだろうか。

ここで、金水 1992 の「直訳の学術書」におけるニヨッテ受動文についての記述を引用してみよう。

…他の分野 (蘭学・英学直訳文法書以外の分野・引用者註) にも極めて機械的な直訳による翻訳物が少なくとも明治 20 年代までは出版されていた。そこでもまた、「ニヨッテ受身文」が当然の如く現れる。

・即チ之ヲ約スレハ、吾人カ普通ニ同情ト称スル所ノ官能ニ由リテ、倫理ノ固定セラルトコトヲ示スニ在リ。

(スペンサー著 松島剛訳『社会平等論』 明治 14 年 (1881))

・国民ノ表面ナル人類ニ付テハ其處ニ種々ノ学問ニ由テ供給サレタル多分ノ面白キ且ツ値打アル知識ガアル

(蘆田東雄訳『スウキンントン氏万国史直訳』 明治 20 年 (1887))

このような機械的な逐語訳の下では、一旦 door や by に「によりて」を充てた瞬間から自動的に「ニヨッテ受身文」が出てくる訳である。文章の規範からすれば破壊的ともいえるこのような文体は、かえって維新の空気とあいまって、

独特の説得力を持ち得たのかも知れない。^{注20}

繰り返しになるが、ニヨッテ受動文の旧主語表示の方法は、直訳文法書から「機械的に」生み出されたものである。そう考えれば、②—1の用例は、be 動詞＋過去分詞「～(ラ)ル」と、by 「(ニ) ヨッテ」という旧主語表示から「機械的に」生み出されたニヨッテ受動文であるとも考えられよう。

しかしながら、この『西国立志編』においては、by 格を「機械的」「自動的」にニヨッテ格に置き換えたわけではない。それは①—1／②—1が同様の構造を持つ対応する原文を持ちながら、異なった旧主語表示マーカーが使われていることから明らかである。

そして、その基準は「受影性」に他ならない。前述の通り、①の用例は受影性を持ち、②はほぼすべて受影性を持たない。その意味的な類型の違いにより、異なった旧主語表示マーカーが用いられたのだと思われる。

ここで、再び日英の受動文を成り立たせる意味的な基準 (affectivity / involvement) について考えてみよう。①の用例は、全て受影性とインヴォルヴメント両方を併せ持つ。なぜならば、英語の受動文においても、日本語「固有の」受動文においても成り立つものであるからである。

そして、②の用例はほぼすべて受影性を持たず、インヴォルヴメントのみを有する。だからこそ、日本語に翻訳するときに、固有の受動文を用いることができず、直訳文法書から生み出されたニヨッテ受動文に翻訳することしかできなかったのである。すなわち、この『西国立志編』におけるニヨッテ受動文は、直訳文法書におけるそれのように「機械的」「自動的」に生み出されていたものではなく、「固有の受動文には翻訳できないから (すなわち受影性を持たないから)」ニヨッテ受動文に翻訳されていたものといえよう。

ただし、5)のように、主体の「海同^{ヘイドン}ノ巧技 (Haydon's genius)」という非情物から「海同^{ヘイドン}」という受影者が想定されやすく、また 6)～11)のような創造 (作成) 動詞による受動文ではないニヨッテ受動文も存在する。すなわち、5)は「受影性」「インヴォルヴメント」両方を有している。その意味では、①—1と同じではあるが、①—1が固有の受動文に翻訳されたのに対し、5)は非固有の受動文 (ニヨッテ受動文) に翻訳されている。

『西国立志編』におけるニヨッテ受動文は「機械的」「自動的」なものではなかった、とはいっても、5)のように、やはり機械的な置き換えに過ぎないと思われるニヨッテ受動文も存在するのである。

6. 結論

日本語の受動文を「歴史的に固有／非固有」という観点から類別すると、それは「受影性 (affectivity)」の有無に帰結する。受影性を持つタイプが歴史的に固有の受動文で

あり、それを持たないものが非固有の受動文である。

その非固有の受動文は、幕末から明治初期にかけての蘭学・英学直訳文法書から「機械的」「自動的」に作られたものであり、受動文を作る be 動詞を「ルゝ」、旧主語を表示する by を「ニヨッテ」に置き換えることによって生み出された。

歴史的に非固有であるニヨッテ受動文は、その萌芽期に位置づけられるであろう『西国立志編』においては、かなりの数が見られるが、それは、日本語固有の受影受動文に翻訳することができないからこそ作られたものであって、必ずしも機械的に作られたニヨッテ受動文ではない。

その根拠として、対応する英文が「受影性」「インヴォルヴメント（それは英語の受動文を成り立たせる必要な条件である）」両方を併せ持っていれば、それはほぼ、日本語固有の受動文（受影受動文）に翻訳されていることが挙げられよう（若干の例外は見られるが）。

すなわち、本論で扱った『西国立志編』においては、直訳文法書のように「機械的」「自動的」にニヨッテ受動文が生み出されたのではなく、固有の受動文（受影受動文）に翻訳可能なもの（インヴォルヴメント・受影性いずれをも持つもの）は固有の受動文に、そして、（原文に忠実に翻訳すれば）固有の受動文に翻訳できないもの（インヴォルヴメントのみを持ち受影性を持たないもの）は非固有のニヨッテ受動文に翻訳されていたのである。

注1 金水 1993、p475.

注2 固有の受動文すべてに受影性を認める、という点に関しては異論もある。例えば「きぬのすそ、もなどはみすのとにみなおしだいされたれば、との、はしのかたより御らんじいだして」（枕草子）といった、古代語に多く見られる「叙景文」（金水 1991 による）タイプにも受影性は認められるとするもの（金水 1991 など）、受影性は認められないとするもの（益岡 1982 など）がある。筆者は、「固有の受動文にはすべて受影性が認められる」という立場を取るが、本論ではこの叙景文タイプの受動文の問題には詳しく立ち入らない。

注3 益岡 1991 による。

注4 益岡 1991 による。

注5 非固有とはいっても、中古仮名散文においてわずかに用例は見られ、また、漢文訓読文においてはこのタイプの受動文を「比較的容易に取り出せる」（金水 1991）という指摘もなされている。しかし、旧主語をニヨッテ格で表示してはいない。

注6 「降格」とは生成文法で、下位の項にあった名詞句が派生によって下位の項に変更されることをいう。

注7 寺村 1982、pp212-254.

注8 属性叙述受動文は、「花子の家は高層ビルに囲まれている」「XはYに含まれる」といった、ある対

象の性質や特徴を表現する「属性叙述」の文。旧主語は二格で表示される。一般に受影性は認められないとされるが(益岡 1991 など)、属性叙述受動文にも<潜在的受影者>を想定し、受影性を認めるとする論もある(天野 2001)。

注 9 当時のオランダ語文法書として代表的なものに「マートシカッペイ(Maatschappij)」があり、マートシカッペイは「ガランマチカ(Grammatica 一品詞論)」「シンタキス(Syntaxis 一統語論)」から成る。『訳和蘭文語』は、前編がガランマチカ、後編がシンタキス。

注 10 引用は、雄松堂『マイクロフィルム版 初期日本蘭仏独語文献集』による。

注 11 引用は、雄松堂『マイクロフィルム版 初期日本英学資料集成』による。

注 12 金水 1992、p15.

注 13 金水 1993 の研究史まとめによる。

注 14 引用は『明治大正文学史集成 3 明治文学史』(1982、日本図書センター)所収の複製による。

注 15 九州大学附属図書館 六本松分館蔵。

注 16 九州大学附属図書館 高瀬文庫洋書部蔵。

注 17 中村が新漢語を創出する際に大きく依ったとされる、ロブシャイド『英華字典』(1866)では、neglect の訳語には「忽略、軽忽、忘、唔顧、失覚、遺忘、怠、…」とあり、「怠忽」はない。あるいは中村が「怠」「忽略」あたりから創出した漢語と考えるべきか。ただし、『大漢和辞典』には「怠忽おこたつてなほざりにする。」とあり、中国古典に出典がある。

注 18 <評価>の事象を表わす受動文は、潜在的受影者が想定されやすい。天野 2001 による。

注 19 ②-2 を降格受動文と判断したのは、「得る(achieve)」「勝ち得る(overcome)」という創造(作成)動詞が固有の受動文(受影受動文)を作ることができないという分析による。

注 20 金水 1992、p555. 引用中の用例はすべて引用元による。なお、原文の用例番号は省いた。

参考文献

- 天野みどり(2001)「無生物主語の二受動文—意味的關係の想定が必要な文—」(『国語学』205)
- 川村 大(2003)「受身文の学説史から 「被影響」の有無をめぐる議論について」(『月刊 言語』4月号)
- 金水 敏(1991)「受動文の歴史についての一考察」(『国語学』164)
- 金水 敏(1992)「欧文翻訳と受動文—江戸時代を中心に—」(『文化言語学 その提言と建設』三省堂)
- 金水 敏(1993)「受動文の固有・非固有性について」(『近代語研究』第九集)
- 工藤真由美(1990)「現代日本語の受動文」(『ことばの科学 4』むぎ書房)
- 久野 暉(1983)「中立受身文と被害受身文」(『新日本文法研究』1986再掲、大修館)
- 小杉商一(1979)「非情の受身について」(『田辺博士古稀記念 国語助詞助動詞論叢』桜楓社)
- 土屋信一(1963)「東京語の成立過程における受身の表現について」(『国語学』51)
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』(くろしお出版)
- 細川由起子(1985)「日本語の受身文における動作主のマーカーについて」(『国語学』144)
- 益岡隆志(1982)「受動表現の意味分析」(『命題の文法—日本語文法序説—』1987再掲、くろしお出版)

- 益岡隆志(1991)「受動表現と主観性」(『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版)
- 三上 章(1953)『現代語法序説—シンタクスの試み—』(刀江書院)
- 宮島達夫(1985)「「ドアをあけたが、あかなかった」—動詞の意味における<結果性>—」(『計量国語学』14巻8号)
- 森岡健二(1991)『近代語の成立 文体編』(明治書院)
- 山本正秀(1965)『近代文体発生の史的研究』(岩波書店)

(そんだ さきこ・九州大学大学院博士後期課程)